

三井のリフォーム 住宅生活研究所長 西田 恭子

コンクールは一番がいい!?

公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター主催の「第三四回住まいのリフォームコンクール」の結果が公表された。おかげさまで今年も三井不動産リフォームは受賞し、コンクールの初年度から三四年間連続受賞という他社に類がない記録を樹立し続けている。

私も「今年は大丈夫だろうか」と毎年結果が気になる。当社一五〇人程のリフォームプランナー達の結果が問われているようにも思えるし、頑張っただけで期限までに仕事の合間に提出した人の事を思つと、ぜひ入賞してもらいたいと思つのだ。

以前は私もその渦中이었다。おかげさまで二度ほど受賞させていただき、一つは優秀賞もう一つは理事長賞だった。当時は賞の重みも各賞の価値の違いもよく分からないまま、とにかく出すことに意味があると思つて提出していた。提出することで自分が関わった設計が物件から作品に変わる気がしていたのだ。

理事長賞は大臣賞の次の賞で、最後に二物件が争われた。結果私の物件が一番

の大臣賞を逃し、二番手の理事長賞に決まったと知ることになった。そして理事長賞と大臣賞は大きく違うことも後日ひしひしと感じることになる。

五〇〇を超える応募から最終候補は五件が残り、当時候補に挙がった物件は現地に審査員の先生による実査が行われた。そこで物件内容をプレゼンするのが、私はいくらと上位候補に残ったというだけで何だかうれしく、さして準備もせずその日を迎えた。「一番でなければだめなんですか」というフレーズが国会で流れたことがあるが、ダメではなくても一番には二番とは全く違う重みと影響力がある。みんな一番の事は取り上げるし、忘れ去られることもない。

当社も三四年連続受賞をうたう中で、三回大臣賞を受賞している。その一つは二階建てを平屋にする減築物件でその後リフォームの中で「減築」という発想を定着させていった。その頃すでに住宅生活研究所の所長をしていた私の所には、国交省の方が減築の可能性を聞きに来訪され、新聞・雑誌

誌・テレビなどのマスコミ関係からの執筆や出演依頼も驚くほど多かった。そこで減築の本も出版したが、この減築受賞物件が二番手だったらどうだっただろうかと思うことがある。世相を創りだすほどのインパクトがあった増改築ではない「減築」だが、二番手でもここまで大きく取り上げられたらどうか。大臣賞受賞後は減築物件が注目を浴び、リフォームの中に浸透していった。

大きい事だけがいいのではない身の丈にあった暮らしの快適さや、小家族化が進む中で夫婦二人の暮らし方やおひとり様として住居面積の見直しなど、減築を住まいの一つの選択肢にする。時世を創りだした。やはりやるなら一番を最初から目指すのも大事なことがあるなと思つた。

みんな平等で仲よしで、競争心を必要以上におおるのは良くないという風潮のなか、運動会が大好きで、かけっこはもとより玉入れにいたるまで勝ち負けにこだわり、顔を真っ赤にして興奮の渦の中で一日を過ごしていたあの頃が懐かしい。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住宅生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。